映画時評

新聞連載「シネマ近見」自注（３）

藤田明　映画評論家

伊勢新聞連載の「シネマ近見」への自注、第５号に続く分、２０１８年２月以降を記すことにしたい。

『エルネスト』（２月１８日付）

阪本順治では一番の出来。冒頭、来日時のゲバラへの対応がまず興をひく。ボリビアへ移ってからの終結部は不十分。内向き日本映画とは対極の意欲が何よりだった。

大林宣彦『花筐』ほか（３月４日付）

意外なくらいモダニズム、鈴木清順とは違う類ながら。後半には邦画ベスト５を挙げた。『エルネスト』『やさしくなあに・・・』（伊勢真一）『米軍が最も恐れた男』『花筐』『家族はつらいよ』の順。是枝の『三度目の殺人』はワースト。県内関連で朴寿南の『沈黙―立ち上がる慰安婦』や『尾鷲九木浦の正月神事』なども見たいと添える。

２０１７年外国映画ベストテン（３月１８日）

①『アイヒマンを追え！』②『甘き人生』③『わたしは、ダニエル・ブレイク』④『希望のかなた』⑤『残像』⑥『未来よ、こんにちは』⑦『セールスマン』⑧『草原の河』⑨『タレンタイム』⑩『沈黙』。（次点）『台北ストーリー』、『アラビアの女王』。「旬報」テンのように米国製優位とはならない一例か。

長江・愛の詩（４月１日付）

長江を河口からさかのぼる作の実現は私の夢だった。小津戦跡をめぐる旅で九江数泊の間に浮上したのだ。弱い点も目につくものの三峡ゲート一つとっても驚嘆。列島内しか見ない姿勢では世界はつかめないわけである。

追想・高畑勲さん（上・４月１５日、中・５月６日、下・５月２０日付）

４月５日に亡くなった（上）では松阪でごろ寝しながら出会った辺りから三重映画フェス２００３に来津を要請したころまで。（中）は津で育った思い出、来津の当日など。後者の少し前に激怒の電話のあった件は記さなかったが。（下）は連句アニメや『かぐや姫・・・』、小津アンケートへの回答など。

キルギス映画『馬を放つ』（６月３日付）

村の近代化とは相いれない主人公ケンタウロス。その名もいい。少数孤立をいとわない生き方に共感。天山山脈のかな

たに朋あり。早くも２０１８年のベストワンと決め込んだ。

映画雑誌の回想―敗戦直後―（６月１７日付）

戦後、まず仙花紙の大判「映画評論」に接し、次が「旬報」のテン号。「映画芸術」「映画春秋」は友達に見せてもらう。中学２年だった。戦後第一次「旬報」の編集部にいた時実象平のおかげで来日したサドウールに後年、会えた点も添えた。

映画批評家の存在―昭和２０年代―（７月１日付）

飯島、北川、Ｑ、岩崎、今村の活躍。実は戦前派である。戦後派は井沢、岡本ら。井沢は浅簿で、週刊誌評のＱ、飯島の方が頼り。佐藤忠男など登場以前のこと。

『ニッポン国ｖｓ泉南石綿村』（７月１５日付）

『万引き家族』を最初に挙げたが、いつのまにか書く機（気）を失う。本文中で長尺ゆえの高い入場料、弁護団と原一男の溝。その辺にも触れたかったが。

『戸田家の兄妹』再検討（８月５日付）

７月２７日、津アストでの上映会による（西部劇付きの２本立て）小津のカット主義の問題点、戦中色を戦後に自主規制で削除した部分もあることなど。

飯島正の見た小津映画（８月１９日付）

『東京物語』４位扱い、成瀬への肩入れ、見出しにあるように「冷静だった小津への関心」に尽きよう。『夏の嵐』『山猫』を絶賛したくせに溝口の『西鶴一代女』に惚れないタイプとまでは記さなかったが。

中国、台湾の力作（９月２日付）

『軍中楽園』『苦い銭』を取りあげた。どちらも県内へは来ず。前者は大陸との関係、９９年に閉鎖。後者は劇映画との境界がアイマイになってきた点、この種の王兵作品の中国国内公開は可能なのかどうかなど。

『カサブランカ』再見（９月１６日付）

９月８日、尾鷲の図書館。三重映画フェスのキャラバン上映の一環で再見。５つの点に触れている。いつも来る教え子に会えず。

戦後の映画批評家（１０月７日付）

希林の晩年４作出演をめぐるテレビ番組が書き出し。７月１日分の続きのようなものである。

２つの日本映画のこと（１０月２１日付）

『沖縄スパイ作戦』と『菊とギロチン』。前者では自国民への牙、今も変わらないのでは。後者は松阪での一件へ、ギロチン社のアナーキストを、のちに立場の違いが鮮明となる江口渙、秋山清はどうみたか、の辺りまで詳述が妙に残った。

北川冬彦の映画批評（１１月４日、１８日付）

全国小津ネットの「ニュースレター」がカラー・８ページ化されたのに伴い、各批評家の小津観を連載しているが、それと関連する類がこの一年、何回か登場したわけだ。

日・中のドキュメンタリー（１２月２日付）

今井友樹の『夜明け前』は、名古屋が１２月なのに津で９月に見た。精神科医療に二つの流れありとは耳にしてきたが、これは患者を縛らない方の呉秀三の評伝。エリートだった点は気にかかったが、後にテレビで京・岩倉病院の在日医師の低い姿勢に接し、相対化ができた。中国の『世界で一番ゴッホを描いた男』には失望。量産模倣画に対する監督側の視点のなさが問題。

フラハティと『モアナ』（１２月１６日付）

戦後すぐ『ナヌーク』をＣＩＥの１６ミリで見たことから記す。父が撮ったサイレント作品に娘が音をつけたわけだが、成功とは言いがたい。映像のデジタル化は見事で、映画史に残る一編に接することのできた喜びを記憶にとどめたい。

以上のような次第だが、年末には事故に遭ったりもした。２０１９年関係はいずれ、ということになる。